

稻子は唇の両端を引き上げて笑つてみせた。が、その切れ長の目は笑つてない。稻子が吐露する本心。稻子の急激な綻びもまた、長い航海の果ての心の緩みなのだろうか。私は何と答えていいかわからず、口を

噤んだ。すると、稻子が反撃のようにな尋ねた。

「林さん、酒井さんと何かあつた？」鋭い。稻子には見透かされていると覚悟はしていたものの、はつきり口に出されると改めて衝撃があつた。

新々句歌歳時記

魚の目を箸でつつくや渾返る

芥川龍之介

芥川は生涯を通じて六百句の俳句を作つた。しかし芥川が自ら『澄江堂句集』として残した句は七十七句にすぎない。そのなかでよく知られているのは、「木がらしや日刺^{ひさし}にのくる海のいろ」(大正七年)だが、その一年前に、友人の恒藤恭^{つねとう}へ宛てた手紙にこの句を書いた。芥川は食べることへの罪を抱いており、焼き魚の目をつつきながら、自分の死を予感していた。『芥川龍之介句集 我鬼全句』(昭和五十一年・永田書房)

嵐山光三郎

「お疲れですね」と言つて欲しくて五千円
払い私はマッサージ受ける

森尻理恵

以前、マッサージを頼んだら「お客様、別にどこも凝つてしませんね」と言われて、なんだかがっかりしたことを思い出した。「凝つてない」とも「凝つてない」のほうが、状況としては嬉しいはずなのだが。「お元気ですね」よりも「お疲れですね」という言葉のほうが嬉しい……マッサージを受ける人間の心理が、ぴたつと言いつてられた一首だ。五千円という具体的な数字も、効いている。『S坂』(平成二十年・本阿弥書店)

俵万智